

# 強迫性障害の動物モデル Marble-burying 行動における セロトニン<sub>1A</sub> 受容体の関与

松下 満彦<sup>1)</sup> 江頭 伸昭<sup>2)</sup> 原田 聡子<sup>2)</sup>  
奥野 良子<sup>2)</sup> 永井 宏<sup>1)</sup> 千鳥 正三<sup>1)</sup>  
内田 直樹<sup>1)</sup> 三島 健一<sup>2)</sup> 岩崎 克典<sup>2)</sup>  
藤原 道弘<sup>2)</sup> 西村 良二<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学医学部精神医学教室

<sup>2)</sup> 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

**要旨：**今回我々は、ガラス玉覆い隠し行動におけるセロトニン<sub>1A</sub> 受容体の関与について行動薬理的検討を行った。その結果、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体完全作動薬である 8-OH-DPAT は、全運動量を低下させることなくガラス玉覆い隠し行動を有意に抑制した。一方、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体部分作動薬である buspirone は、有意ではないが抑制傾向であった。このような抑制作用の違いは、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体に対する作用の強さの違いによるものと考えられた。さらに、8-OH-DPAT による抑制作用は、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体遮断薬である WAY-100635 および WAY-100135 によって拮抗された。これらのことから、8-OH-DPAT のガラス玉覆い隠し行動の抑制作用は、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体を介していることが示唆された。以上のことから、ガラス玉覆い隠し行動は、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体が重要な役割を果たしていることがわかった。また、ガラス玉覆い隠し行動は強迫性障害の動物モデルであることから、セロトニン<sub>1A</sub> 受容体作動薬は強迫性障害の治療薬としての可能性が示唆された。

**キーワード：**ガラス玉覆い隠し行動, 強迫性障害, セロトニン<sub>1A</sub> 受容体, 8-OH-DPAT